

# 唯物論研究年報

1985年版

唯物論研究協會編

白石書店



## 創刊の辞

『唯物論研究年報』が誕生しました。

わたしどもは、ことし、新しい季刊の機関誌『思想と現代』を出しはじめて、このほどその第三号を刊行しました。いま、ここに、予定どおりこれとほぼ同じ時期に、『唯物論研究年報』創刊号を世に送るはこびになったものです。

この機会に、『年報』（と略記します）の刊行に託するわたしどもの念願・意図について一言させていただきます、と存じます。

わたしどもは、これまで一貫して、複雑で矛盾に満ちたこの時代・この社会の実践上・思想上の諸課題の理論的説明に力いっぱい寄与することをねがい、そのなかで唯物論研究そのものを深め発展させることをめざしてきました。わたしどものこうした一貫した関心ないし課題意識が、『思想と現代』の刊行を推しすすめる動力にもなっていれば、この『年報』を発刊する動機にもなっている、と、まず言っておきたい、と思います。

しかし、この二つの刊行物のあいだには、同じ関心ないし課題意識に支えられているというこうした共通性とともに、重点の置きかた・狙いという点における差異もある、とも言わなければなりません。すなわち、一方、『思想と現代』が、現代社会の危機のただなかに身を置いて、思想上のヘゲモニーをめぐるすではげしくかわされている諸流派のたたかいのなかへこれまでよりも積極的に打って出よう、という姿勢をはっきりとり、その意味

で、どちらかと言えばジャーナリスティックな性格をつよくもっているのにたいして、他方、この『年報』のほうは、その誌名がさししめすとおり、唯物論研究そのものの深化・発展を主目標にする、という点で、——もちろん、世上ふつうの学会誌や大学の紀要などとは根本的に異なっているにせよ、——よい意味でアカデミックな学究的な道を歩もうとしている、と申せましょう。たとえば、唯物論また弁証法のカテゴリー・基本法則などのいっその究明、唯物論の見地にもとづいた重厚な哲学史的研究（それも、対象をヨーロッパ人たちの遺産に限局することなく、日本はもちろん、朝鮮・中国・インド・イスラーム圏などにおける哲学上・思想上の諸達成をも対象として）、現代哲学の諸潮流の立ち入った検討、人間論・社会論・科学論・技術論・文化論・芸術論・宗教論その他の諸分野における意欲的な探求、などなどといった息の長い堅実な学問的努力の成果である力のこもった論稿は、どちらかと言えば『年報』のほうに掲載されるにふさわしいものだ、と考えられるのです。

以上は、わたしなりのイメージ・私見にすぎませんが、いづれにせよ、全国の唯物論研究者の多彩な問題意識と旺盛な研究意欲とが、『思想と現代』の発行とならんで『年報』の刊行をも切実に必要なとしている、ということ、この点にはまったく疑いの余地がない、とわたしは考えます。

わたしどもは、『年報』の創刊にあたって、今後ともその内容をいっそう充実したものにするために力をつくしていく、という決意を新たにするものです。読者諸賢がわたしどものこの努力にあたたかい激励と力づよい支持とを寄せてくださるよう、心から願ってやみません。

一九八五年十月

唯物論研究協会委員長

秋間 実

唯物論研究年報一九八五年版

目次